

小中高生の一次性頭痛に対する理学療法：患者背景とその効果

研究代表者：高橋大生

【目的】

小中高生の頭痛患者に対して、薬物療法と理学療法を行い、効果を得ている。患者の特徴とその効果について報告する。

【方法】

対象は2022年3月から5月に理学療法を実施した小中高生の頭痛患者55名(男性27名、女性28名、平均年齢 13.7 ± 2.7 歳)。評価項目は頭痛の分類、頸椎X線画像による評価、問診による頭痛の頻度と欠席の有無、痛みの評価、日常生活の動作機能、心理機能評価を理学療法の開始時に測定した。週1回40分間の理学療法を行い、頭痛経過を参考に頭痛頻度が週1~2回以下となり登校に支障がなくなった時点で終了とした。

【結果】

頭痛分類は緊張型頭痛98%、慢性片頭痛が2%。頸椎X線画像は正常40%、生理的彎曲消失51%、側彎9%。罹患期間の平均値495.5日。頭痛の頻度は1日以下/月18.2%、1~14日10回以上/月30.9%、15日以上/月50.9%。頭痛強度は1週間の平均値47.6mm、PCSの反芻は平均値12.9、無力感は平均値9.1、拡大視は中央値3.0、合計は平均値25.7。HADSの不安は平均値6.32、抑うつは中央値4.0、合計は平均値14.40。疼痛部位は前頭部60%、側頭部27.3%、こめかみ60.6%。頸部周囲の圧痛所見は僧帽筋右92.2%、左86.3%、肩甲挙筋右80.4%、左86.3%、頭板状筋左右82.4%。HIT-6は68%が重度障害、EQ-5D-5Lは平均値0.8042。学校登校は欠席無しが52.7%、欠席ありが40.0%、早退ありが7.3%。理学療法介入(椎間関節可動性低下、筋、筋膜へのアプローチなど)は平均5.2回であった。

【結論】

理学療法は小中高生の頭痛の治療のひとつとなりえる。